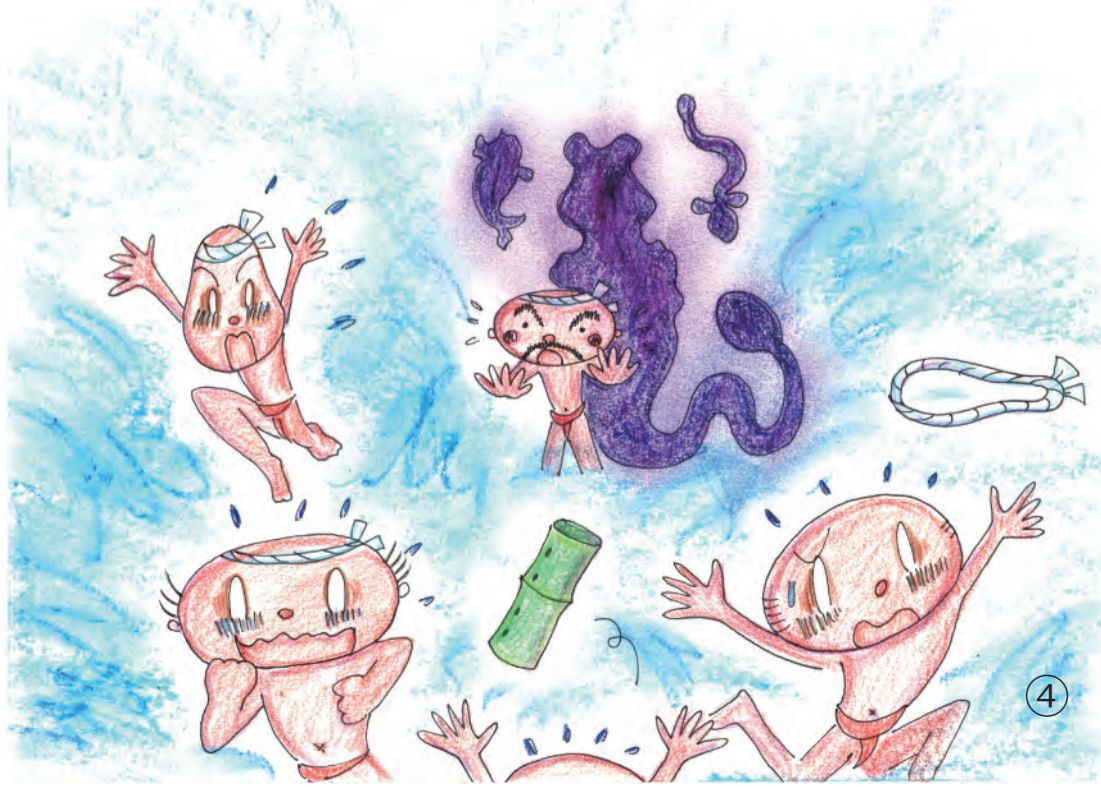


六兵衛とうなぎ



☆おしまい☆



①六兵衛とうなぎ

⑥しばらくして、
恐る恐る戻ってきた漁師たちに、
六兵衛は今の話をして聞かせた。

「もってえねえことだ。
川の主が、おらたちに、
ことの道理を教えてくれただよ」

彼らは川に向かって手を合わせ、
やがて六兵衛を先頭に、
ご神体を八坂神社に納めに行った。

するとやがて、
また小野川は水に満ち、
豊かな流れと実りとを取り戻したと。

②昔、小野川に、
六兵衛といううなぎ取りの名人がいたそうよ。
六兵衛にかかれば、
うなぎでもコイでも、
六兵衛の掛けた竹筒に、
狙ったかのようにひっかかってくる。
だが六兵衛は、
毎日ほんの数匹しか、
うなぎを取ろうとしなかった。
「欲のねえことだ。
六兵衛さんほどの名人なら、
ちいと本腰を入れりゃ、
長者様にでもなれるによ」
他の漁師たちはそうからかったが、
六兵衛は、
「毎日食えるだけ取れりゃ、
おらはそれでええだ」と、
取り合わなかったと。

⑦それからというもの、

この辺りの人は、
七月を「祇園月」と言い、
この時期だけは
うなぎやコイを取って
食べないことにしたそうよ。

そして、この出来事を忘れないために、
今も毎年祇園祭をおこない、
川魚たちの霊を慰め、
豊かな恵みに感謝をささげておるんだと。

③ところが、その年は雨が少なく、
川の水が減り、
うなぎ取り名人の六兵衛にさえ、
一匹のうなぎもコイも取ることが
出来ないほどだったと。

漁師たちは皆、途方に暮れ、
空っぽの竹筒を引き揚げては、
ため息をつくばかりだった。
「このまんまじゃ、
おらたち誰もが干上がってしまうだ」
漁師たちがそう言った時、
川の上流で、
何かきらりと光ったかと思うと、
それが水煙を上げて、
すごい勢いでこちらに近づいてきた。

⑧おしまい

(製作)
<製作>

原著者：菱木 敏子
語り協力：福の家社中 梅八
(落語家・江戸文字職人)

挿絵：守谷 菜都子
冊子作成：岡田 董

(お問い合わせ)

稲敷市地域おこし協力隊
移任・定任コンシェルジュ
担当：岡田 董
TEL：029（892）2000



稲敷市昔話動画で配信！！

④見ればそれは、

沢山のコイやうなぎに囲まれた大うなぎだった。
「川の主がお出ましになったあ！
おらたちがいつもうなぎを取って食うで、
怒って川底に引きずりこもうとして
来たに違いねえ」
漁師たちは皆、
泡を食らってふるえ出した。

「ま、待て待て！
おらたちに用があるから
出て来たのかもしれないねえでねえか」
六兵衛が慌てて止めたが、
皆、先を争って逃げて行ってしまった。

一人残された六兵衛に向かい、
川の主は、
ゆっくりと口を開いた。

⑤「六兵衛、

お前はものの解った男のようだから、
お話します。
私はお前たち漁師が、
うなぎやコイを取って食べることを
怒ってはいません。
ですが、あまりにも私の子どもたちを
根こそぎ取られてしまつては、
私たちは次の子どもたちを
生み育てる事が出来ません。
そうなれば、やがてはこの川も枯れ果て、
お前たち人間も
魚を取ることが出来なくなるのです。
そのことをよく考えてもらいたくて、
私はここにまいりました」
小野川の主は、少し悲しげにそう告げると、
たちまち水の泡に包まれて姿を消したと。
呆然と座り込んだ六兵衛の前に、
ご神体がそっと置かれていた。